2025 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	**清末における漢訳イソップの受容と影響** **－陳春生『伊朔譯評』を中心に－**
キーワード	①清末文学、②漢訳イソップ、③『伊朔譯評』

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏　名	キョウ　ショウ 喬　昭
配付時の所属先・職位等 （令和７年４月１日現在）	佛教大学　文学部　講師
現在の所属先・職位等	佛教大学　文学部　講師
プロフィール	関西大学東アジア文化研究科文化交渉学専攻博士後期課程修了後、関西大学教育推進部教育開発研究センターチューター 、文京学院大学英米コミュニケーション学科非常勤講師を経て、2024 年 3 月より現職。

1. 研究の概要

本研究は周縁からアプローチする方法を用い、研究対象の『伊朔譯評』の周辺から中心に、そして中心を拡大し周辺を展望するという研究方法に取り組みながら進めていきた。中国での翻訳活動は、西暦2世紀の仏典の翻訳と、16世紀末から17世紀にかけて宣教師によってもたらされた翻訳にまで遡る。アヘン戦争（1840）が終わるまでは、「西学東漸」という風潮が広がり、西洋文化が急速に中国社会に浸透し、翻訳活動も活発になった。特に漢訳イソップは当時の東西文化交流の産物と認識される。本研究では、中国の清末（1840-1911）における漢訳イソップの受容と影響について焦点を当て、陳春生（1867-1940）の『伊朔譯評』に注目し、特に各版本と当時の報刊（新聞・雑誌）の考察を通じて、当時の『イソップ寓話』の受容と中国「寓言文学」への影響を詳細に分析した。また、『イソップ寓話』は当時に与えた影響と、宣教師が西洋からもたらして作品がどのように人々に読まれてきたのかを、国際的な視点から中国における『イソップ寓話』受容の諸相を論究するものであり、文化交渉学の新たな視点を提供した。

2. 研究の動機、目的

イソップに関する研究は少なくはないが、現在に至るまで『伊朔譯評』を詳細に論じたものはない。また、作者の陳春生に関する先行研究は管見の限り、以下の四つである。

まず、佐藤一好（1999）の「陳春生『東方伊朔』研究序説―キリスト教的性格を中心に―」の注釈部分で陳の情報を簡単に紹介しているが、「多くの情報は未見」と記述されている。二つ目は戈宝権 (2013)『中外文学因縁』においても言及があるが、細かい紹介はされていない。三つ目は内田慶市 (2014) の『漢訳イソップ集』に「中国人の編者は陳春生という人であるが、この人についてはよくわかっていないが、上述『伊朔譯評』の編訳者でもある」と言及している。また、佐維剛（2019）は「清末民初基督教作家陳春生生平及著述考」という論文で陳春生のキリスト教文章やキリスト業務を中心に紹介した。

次に、『通問報』第一千二百二十三回の「首論」欄には『伊朔譯評』が当時大いに人気を博し、再版は 10 数回を数えることが指摘されている。清末の漢訳イソップである『伊朔譯評』

は寓話数も多く内容が豊富である。さらに、筆者の調査によると、『伊朔譯評』は当時「讀伊朔譯評書後」(『通問報』第 410 回、1910、p. 8）のような高い評価を与えられた。

まとめると、これまで作者陳春生とその著作である『伊朔譯評』に関する研究は多くなされなかった。しかし、清末のイソップ受容を知るうえで重要な人物であると言えるため、筆者は陳春生の家庭環境、経歴、人間関係といった周辺的資料の考察を通じて、その存在と創作との関係を強調する必要があると考える。また、資料調査によって、再版の回数や出版情報、また当時の文人や一般人達に与えた影響などから、『伊朔譯評』は清末におけるイソップ漢訳版において重要な存在であることがわかった。

本研究では、以下の問題に答えることを目指す：

① 『伊朔譯評』を通じて、清末時代における漢訳イソップ受容の具体的な状況はどのようなものであったか？
② 陳春生の『伊朔譯評』が清末の中国文学および「寓言文学」に与えた影響は何か？
③ 『イソップ寓話』の受容を通じて、西学東漸がどのように進展したか？

3. 研究の結果

本研究では、陳春生の『伊朔譯評』を中心に、版本・書誌・報刊資料の調査を進め、中国における『イソップ寓話』受容の実態について考察を行った。従来の研究では言語学的な視点からの分析が中心であったが、本研究では文化交渉および文学受容の観点を取り入れ、『イソップ寓話』が清末中国社会にどのように受容され、再編されていったのかを検討した。

研究の結果、以下の点を明らかにすることができた。

① 陳春生の経歴および活動の再検討
従来、陳春生に関する研究は限られていたが、本研究では新聞・雑誌・関連資料の調査を通じて、その経歴やキリスト教活動、出版活動との関係を整理した。これにより、『伊朔譯評』の成立背景と陳春生の役割について、新たな視点を提示することができた。

② 『伊朔譯評』各版本および書誌情報の整理
『伊朔譯評』の現存版本について調査を行い、各図書館の所蔵状況や版本間の異同を確認した。特に、従来十分に注目されてこなかった版本や書誌情報上の問題点を整理し、漢訳イソップ研究における基礎資料の補足を行った。

③ 清末漢訳イソップ研究への新たな知見の提示
本研究では、『伊朔譯評』を『意拾喻言』系統（内田慶市による漢訳イソップの三つの系統論：『漢訳イソップ集』、2014）との関係から再検討し、漢訳イソップにおける翻訳・受容の流れについて考察した。また、当時の報刊資料を通じて、『イソップ寓話』が中国の寓言文学や近代出版文化に与えた影響についても分析を行った。

以上の研究を通じて、『イソップ寓話』が単なる翻訳文学にとどまらず、清末中国における東西文化交流や文学形成の一端を担っていたことを具体的に示すことができた。

4. 研究者としてのこれからの展望

本研究を通じて、清末時期における漢訳イソップ、とりわけ陳春生『伊朔譯評』の重要性を改めて確認することができた。今後は、『伊朔譯評』のみならず、清末から民国初期にかけての漢訳イソップや中国寓言文学との関係について、より広い視野から研究を進めていきたい。

特に、新聞・雑誌などのメディアを通じた受容や流通の問題、さらに教育・児童文学との関係にも注目し、中国における「イソップ寓話」受容の全体像を明らかにしたいと考えている。また、東アジアにおける西洋寓話受容という国際的な視点からも検討を行い、文化交渉研究や近代文学研究への発展を目指したい。

今後も国内外の資料調査と研究成果の発信を継続し、論文投稿や学会発表を通じて研究を深化させていく予定である。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

このたびは、研究助成という貴重なご支援を賜り、心より御礼申し上げます。

本研究では、これまで十分に研究されてこなかった清末時期の漢訳イソップである『伊朔譯評』を中心に、版本調査や関連資料の収集・分析を進めることができました。特に、国内外の図書館・データベースを利用した資料調査や、報刊資料の整理を継続的に行うことができたのは、本助成によるご支援のおかげです。

また、本研究を通じて、『イソップ寓話』の受容が単なる翻訳文学にとどまらず、近代中国における東西文化交流や文学形成とも深く関わっていたことを改めて認識することができました。若手研究者として、このような研究に継続的に取り組む機会をいただけましたことに、深く感謝申し上げます。

今後も研究成果を積極的に発信し、論文投稿や学会発表を通じて、研究の発展と学術交流に努めてまいります。改めまして、このたびの温かいご支援に厚く御礼申し上げます。



ローマ大学における研究発表の様子